

読書の夏 ～お薦めの一冊～

研究全体会Ⅱお疲れ様でした。本音で話し合えるのが附属小の研究同人のよいところ、研究部からの提案に自分が思ったことを積極的に発言する先生方の姿により附属小の伝統が残っていることを実感しました。

附属小の教員にとって、最も大切なのは全校授業の事後検討会。研究全体会もそれにならぶ大事な研鑽の場、切磋琢磨の場だと私は思っています。最近はどうも「ワークショップ型の検討会」が流布し、「全員の前で話す」ということが軽んじられてきているように危惧していたので、昨日の先生方の姿勢に正直ほっとしました。

まともなくていいんです。話そうとすること、そのために考えをまとめようとする、そのような経験の繰り返しが先生方の力になると私は思っています。今年来た先生方の発言もありました。あのような全体の話合いの場で発言するのは「勇気」がいますが、遠慮せず自分から「必ず何か言おう」という姿勢で話合いに参加してください。時には提案する側の研究部であっても、先生方の意見を聞いていた感じたことや思ったことは発言してください。

夏休みになっても、今日から個人面談等が始まって忙しく過ごすことと思いますが、読書の夏です。ぜひこの夏休み、時間があったら読んで欲しい本を紹介します。

◎『もくせい1号～10号』 宮城教育大学附属小学校 編

第1号は1975年に刊行されていますが、1978年には第10号が刊行されています。現在の附属小学校の教育活動の根幹を探る上では必読の一冊。本校の使命である実践研究とは何かを探る上でもこの夏ぜひ目をお通しておきたい一冊。

◎『教えるということ』林 竹二 著

元宮城教育大学学長。教育の再生を求め続けた哲学者実践した授業についてまとめたもの。子どもとの対話で何が行ったのか。教育の根本を考える上で重要な一冊。

◎『授業の深さをつくるもの』横須賀 薫著

元宮城教育大学学長。1993年から本校校長を3年間兼務。授業について分かりやすく解説。読めば読むほど授業の奥深さを実感。

◎『平尾 誠二 人を奮い立たせるリーダーの力』マガジンハウス編

これから宮城の教育を背負っていく附属小の先生方にお薦めの一冊。私も同世代のヒーローとして憧れた一人。リーダーとしての挟持はさすが平尾。

◎『数学の学び方・教え方』 遠山 啓著

算数部や算数に興味のある先生には必読の一冊。「数学は適切な教え方さえすればすべての子どもに理解できるはずのものである。」こうした観点に立って丁寧に述べられ算数の指南書。

(文責：副校長 手代木)